

講義	内容	参考文献
<p>1. メディアとは何か 1 ワークショップ 「メディアとは何か」</p>	<p>第一回目の授業では、まず、私たちが研究対象とする「メディア」とは何なのか、その定義を考える。初めに、自分たちの生活の中にあるメディアを探り、その次に歴史を溯り、また空間や国を超えて、どのようなメディアが存在してきたのか、グループごとに可能な限り自由に挙げていく。そして、デジタルからアナログまで多様なメディアの存在について検討するなかから、「メディア」の定義を、まずは自由に自分たちで考え、その後、どのように分類可能か、そしてどのような課題が存在するのかをワークショップ形式で検討していく。</p> <p>講義では、一応、「メディア」「マス・メディア」などについての一般的な定義を紹介するが、研究者自らが日頃巻き込まれているメディア・コミュニケーションをいかに対象化することができるのか。研究にあたる自らの姿勢についても意識化することを目的とする。</p>	<p>マクラーハン, M.『メディア論-人間の拡張の諸相』みすず書房 水越伸『21世紀メディア論』放送大学教材(2014) 伊藤明己『メディアとコミュニケーションの文化史』世界思想社 ほか</p>
<p>2. メディアとは何か 2 複製技術のインパクト</p>	<p>第二回目の授業では、メディアと権力という視点から複製技術の進展とその影響について考察する。最初に、マクラーハンに多大な影響を与えた H. イニスの業績（空間型—時間型／文字や知の独占への着目）について振り返り、そして、グーテンベルグの活版印刷のインパクトを取り上げながら、メディアとメッセージ、そして権力との関係について概観する。また W.オングによる声の文化から文字の文化への移行についての論考、B.アンダーソンの「想像の共同体」についても論じる。</p> <p>後半は、こうしたメディア論の基礎的研究史を踏まえた上で、江戸期に普及した日本の印刷メディアのありようについてグループごとに検索しながら、同時期の印刷メディアと日本社会、風俗、そして権力との関係についてメディア論視座からのディスカッションを行い、考察を深める。</p>	<p>イニス,H.『メディアの文明史-コミュニケーションの傾向性とその循環』新曜社 吉見俊哉・水越伸『メディア論』放送大学教材(2004) 伊藤明己『メディアとコミュニケーションの文化史』世界思想社 オング,W.『声の文化と文字の文化』藤原書店 アンダーソン,B.『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT出版</p>
<p>2. メディアとは何か 3 19世紀情報技術の進展</p>	<p>第三回目の授業前半では、19世紀に多様な情報技術が産み落とされ、そこから欧米で生みだされた写真、映像、電信、電話、レコード、ラジオなどといった近代メディアの生成と展開を追いながら、情報技術とメディア、そして社会について、ソシオ・メディア論的見取り図に基づいて概説する。</p> <p>後半では、上述のメディアのひとつ写真を取り上げ、写真が私たちの社会に普及したことによって、世の中の</p>	<p>水越伸『メディアの生成—アメリカ・ラジオの動態史』同文館出版 吉見俊哉『「声」の資本主義—電話・ラジオ・蓄音機の世界史』河出文庫 マーヴィン, C.『古いメディアが新しかった時—19世</p>

	<p>ありようや人びとの視覚、認識にいかなる変容が起きたのかについて考察する。J.バージャーによる『見るということ』, V.フルッサーのテクノ画像といった概念, S.ソントグの写真論などを紹介しながら, 現代社会における写真や映像が持つ権力について, ワークショップ形式で批判的, メディア・リテラシーの視点と比較検討しながら議論したい。</p>	<p>紀末社会と電気テクノロジー』新曜社 バージャー, J.『見るということ』ちくま学芸文庫 フルッサー, V.『写真の哲学のために』勁草書房 ソントグ, S.『写真論』晶文社</p>
<p>4. メディアとは何か 4 20世紀型マス・メディア社会の成立</p>	<p>19世紀後半の情報技術が, その後, いかにもマス・メディア社会の確立に寄与することになったのか。第4回の講義では, 近代化を目指す日本に舞台を移し, 明治期日本のメディア敷設と東京一地方の関係, 戦争報道等を事例として概観しながら, いかにも新しいメディアが国民国家の安定, 一極集中的支配に用いられたのかについて考える。</p> <p>後半では, 新聞をはじめとするマス・メディアが普及しはじめた20世紀初頭を生きた世界の識者たちが, 当時の社会状況をどのように認識していたかを確認しながら, 21世紀インターネット時代の識者たちがどのように新しいメディア社会の現状を認識しているかと比較することで, 新しいメディア状況における人間の関心やありようについてともに考えてみたい。</p>	<p>加藤秀俊・前田愛『明治メディア考』中央公論社 藤井信幸『通信と地域社会』日本経済評論社 伊藤明己『メディアとコミュニケーションの文化史』世界思想社 松田裕之『明治電信電話(テレコム)ものがたり-情報通信社会の『原風景』』日本経済評論社 山田俊治『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』NHKブックス</p>
<p>5. メディア研究の射程1 大衆社会と擬似環境</p>	<p>第5回の講義では, 20世紀前半を生きたジャーナリスト/思想家W.リップマンの社会分析を通して, 当時のマス・メディア社会が抱えていた問題について考える。とりわけ「擬似環境」「ステレオタイプ」といった基礎的な概念に着目しながら, 第二次世界大戦に新たなマス・メディア環境がどのように関わったかについて当時の資料を参考にしながら概観する。さらに, こうしたメディア・コミュニケーション状況をめぐる問題意識からマス・コミュニケーション研究へと発展していく道筋をフランクフルト学派を例に辿る。</p> <p>後半は, 21世紀前半を生きる私たちが, いかほどにマス・メディアの影響を受け続けているのか否か, ゲーム的ワークショップと授業で扱う概念を活用したブレーンストーミングを試みる。</p>	<p>リップマン, W.『世論(上・下)』岩波文庫 ル・ボン『群衆心理』講談社学術文庫 佐藤卓己『大衆宣伝の神話-マルクスからヒトラーへのメディア史』ちくま学芸文庫 水越伸『21世紀メディア論』放送大学教材(2014) NHK『映像の世紀』(DVD)</p>
<p>6. メディア研究の射程2 マス・コミュニケーション論 - 強力効果論と限定効</p>	<p>戦後, 主にアメリカで発展したマス・コミュニケーション論について概観する。皮下注射モデル/弾丸モデルと言われるようなメディアがオーディエンスに直接的に強</p>	<p>バラン, S.J. 他『マス・コミュニケーション理論(上・下)』新曜社</p>

<p>果論</p>	<p>力な影響を与えるとする強力効果論からオピニオンリーダーを介した影響を謳う二段階仮説モデルなど、その影響は限定的とする基礎的モデルについて概説する。また、新強力効果論とされる議題設定機能やプライミング効果、沈黙のらせん理論やメディアシステム依存理論、培養効果等についても概説する。</p> <p>後半では、これらの理論を現代のデジタル・メディア環境に適応可能か、あるいはどのように異なるのか、互いに事例を挙げつつディスカッションを行う。</p>	<p>竹内郁郎・橋元良明『メディア・コミュニケーション論 (1・II)』北樹出版 キヤントリル,H.『火星からの侵入 - パニックの社会心理学』川島書店 ほか フロム, E.『自由からの逃走』東京創元社</p>
<p>7. メディア研究の射程 3 メディア・スタディーズの 登場</p>	<p>第7講では主にアメリカで発展したマス・コミュニケーション論に対して現れた英国のカルチュラル・スタディーズをはじめとする批判的メディア研究について扱う。講義では、P. ドゥ・ゲイの『実践カルチュラル・スタディーズ』を中心に、代表的な著作が提起しようとしたことがらに目を向け、20世紀後半に彼らの批判的問題意識と方法論がメディア研究のみならず文化研究全般に与えた影響力と射程について検討する。</p> <p>授業の後半は、カルチュラル・スタディーズが提起した問題意識と方法論から、現代社会においてどのような研究テーマを掲げることが可能か、グループごとにディスカッションを行う。</p>	<p>P. ドゥ・ゲイ『実践カルチュラル・スタディーズ - ソニーウォークマンの戦略』大修館書店 吉見俊哉『カルチュラル・スタディーズ』岩波書店 吉見俊哉『知の教科書 カルチュラル・スタディーズ』講談社選書メチエ 伊藤守『文化の実践, 文化の研究 - 増殖するカルチュラル・スタディーズ』せりか書房</p>
<p>8. メディア研究の射程 4 意味と記号</p>	<p>第8講は、記号論について、ラングとパロール、シニフィエ/シニフィアン、パラディグムとサンタグムなどの基礎的な概念に溯って概念を確認し、ソシュールに始まる構造主義の成果についても概観する。</p> <p>そののち、バルトの記号論、メディア・コンテンツ分析を中心にとりあげながら、授業の後半ではその分析枠組に従い、現代の広告の内容分析に挑戦する。</p> <p>複数の参加者間で実験的に試みることによって、第7講、第8講での学びや消費社会とメディアとの関わりについて確認しつつ、研究手法における現実的な課題についても提起してみたい。</p>	<p>丸山圭三郎『ソシュールを読む』講談社 バルト, R.『現代社会の神話』みすず書房 バルト, R.『映像の修辞学』朝日出版社 アレン, G.『ロラン・バルト』青土社</p>
<p>9. メディア研究の射程 5 メディア・イベント</p>	<p>第9講では、まず、ブーアスティン『幻影の時代』を手がかりに、20世紀半ばのメディア観について確認する。イベント、観光、政治などがどのようにメディアと関わり、イベント化しているかについて概説し、その後、ダヤーン&カツによる「メディア・イベント」論を紹介しながらさらにそのプロセスを掘り下げる。</p>	<p>ブーアスティン, D.『幻影の時代』東京創元社 ダヤーン, D.&カツ『メディア・イベント - 歴史をつくるメディアセレモニー』青弓社</p>

	<p>さらにメディア史研究においてたびたび扱われるメディア・イベントの歴史的研究を踏まえ、現代においても実に多様なできごとがメディア・イベント化している現状を踏まえ、後半では、インターネット社会、ソーシャル・メディア時代に、メディア・イベント論がいかにかに有効か、あるいは課題を有しているかについて議論してみたい。</p>	<p>津金澤聡広編著『近代日本のメディアイベント』同文館 黒田勇『ラジオ体操の誕生』青弓社</p>
<p>10. メディア研究の射程6 空間とメディア</p>	<p>第10講では、9講を踏まえ、場所、空間とメディアについて3つの視点を中心に考察する。一つ目は、J.メイロヴィッツの「場所感覚の喪失」を手がかりに、メディア普及と権威の混乱、民主化について論じる。二点目は、メディアや文化のグローバリゼーションにともなう課題について、メディア普及と空間変容過程を確認しながら論じる。そして3点目には、メディアとシミュラークルの空間について事例を見ながら概説する。</p> <p>後半には、現代社会における特徴的な状況や問題状況について、上記の理論からいかに説明することができるか、各自でラフ・スケッチを試みる。</p>	<p>メイロヴィッツ『場所感の喪失 上』新曜社 ボードリアール, J. 『シュミレーションとシュミラークル』法政大学出版局 北田暁大『増補・広告都市東京』ちくま学芸文庫</p>
<p>11. メディアと現代社会の諸問題 (ワークショップ) 1. ネットワーク理論入門</p>	<p>11講からは現代社会の諸問題とメディアとの関わりについての整理と討論を行う。第11講では、インターネット時代の傾向を説明するネットワーク理論に焦点を当てる。ノードやパスといった概念からネットワーク理論の基礎について、その特徴を把握し、ネットワーク型メディア社会の課題について考える。一方、サイバースケードや炎上、セカンドライフやN次創作、集合知といったネットワーク社会において話題となるテーマについて、参加者各自が社会学的な視座からの発表/討論を行う。</p>	<p>バラバシ, A. 『新ネットワーク思考—世界のしくみを読み解く』NHK出版 東浩紀『弱いつながり—検索ワードを探す旅』幻冬社 クリスタキス, N.A., & ファウラー, J.H. 『つながり—社会的ネットワークの驚くべき力』</p>
<p>12. メディアと現代社会の諸問題 (ワークショップ) 2. 東日本大震災とソーシャル・メディア</p>	<p>第12講では、2011年に発生した東日本大震災と、そのとき各地に生成し、萌芽的に浮かび上がった市民の多様なソーシャル・メディアの活用の姿について整理する。震災発生段階の記録、報告といった行為から、行方不明者の探索や生活支援、その後のアーカイブや復興支援に、プロの、あるいは市民のメディアはいかに役立ち、役に立たなかったのだろうか。</p> <p>なお、本講の授業前には、日本を代表するオルタナティブ・メディア「Our Planet TV」の白石草が福島原発のテレビ電話を編集した「東電テレビ電話 48時間の記録」について事前にYouTubeで視聴しておくことを勧</p>	<p>丹羽美之・藤田真文『メディアが震えた』東京大学出版会 遠藤薫『メディアは大震災・原発事故をどう語ったか—報道・ネット・ドキュメンタリーを検証する』東京電機大学出版会 高野明彦・吉見俊哉・三浦伸也『311情報学—メディアは何をどう伝えたか』岩波</p>

	めたい。	書店
<p>13. メディアと現代社会の諸問題 (ワークショップ)</p> <p>3. メディアと社会的包摂</p>	<p>マス・メディア, ジャーナリズムはこれまで, 社会的弱者の状況や課題を報じることによって, あるいは国民全体が楽しめるコンテンツを提供することによって, 多くの人びとを単一的なメディア環境に包摂してきた。一方, インターネット環境は, 多様な人為的境界を越えて人びとを結びつけていく一方で, 経済的, 地理的, 社会的な差によってあらたなデジタル・デバイドを生み出すことが危惧されてもいる。</p> <p>第 13 講では, 社会的弱者と呼ばれる人びと, 周縁化されがちなひとびとをいかにメディアによって社会へと包摂することができるのか。その課題は何か。事例をもとに検討する。</p>	<p>内藤直樹・山北輝裕『社会的包摂/排除の人類学』昭和堂</p> <p>松浦さと子・川島隆『コミュニティメディアの未来』晃洋書房</p> <p>小川明子『デジタル・ストーリーテリング』リベルタ出版</p> <p>松本恭幸『コミュニティメディアの新展開: 東日本大震災で果たした役割をめぐって』学文社</p>
<p>14. メディアと現代社会の諸問題 (ワークショップ)</p> <p>4. メディア・リテラシーの射程</p>	<p>第 14 講では, メディア・リテラシーという視点から, 情報が溢れるデジタル・メディア社会において私たちがいかにメディアを利用し, また市民社会を維持していけるのかについて考える。</p> <p>これまで論じられてきたマス・メディアを想定したメディア・リテラシーが提起していることは何かを改めて確認しながら, ディスカッションをベースに, 自らが何でも発信することのできるデジタル時代のリテラシーとはどのようなものであるべきかについて検討する。</p>	<p>水越伸・吉見俊哉『メディア・プラクティス』せりか書房</p> <p>水越伸『21 世紀メディア論』放送大学教材(2014)</p> <p>浪田陽子・柳澤伸司・福間良明『メディア・リテラシーの諸相: 表象・システム・ジャーナリズム』ミネルヴァ書房</p>
<p>15. 講義の振り返り</p>	<p>ここまでの講義を振り返り, 学生たちが各自研究テーマにいかなる視点から取り組むか, 発表と質疑応答を行う。</p>	